

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21606

研究課題名（和文）分析哲学の研究手法を用いた精神医学の理論的基礎の確立

研究課題名（英文）Philosophical Study of Theoretical Foundations of Psychiatry

研究代表者

鈴木 貴之（Takayuki, Suzuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20434607

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：分析哲学、とくに心の哲学の概念や理論に依拠した分析を通じて、現在の精神医学にはいくつかの根本的な理論的問題があることが明らかになった。第一に、現在の精神医学には生物学的なものから社会的なものまで、さまざまなアプローチが混在するが、それらの関係は明らかではない。第二に、精神医学においては医学的問題と道徳的問題の境界がしばしば問題となるが、その線引きの基準も明らかではない。第三に、さまざまな精神疾患はどのように分類されるべきか、その分類基準はどのようなものであるべきかも明らかではない。これらいずれの問題に関しても、臨床的な有用性が最終的な基準であるのかどうかについて、さらなる検討が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神疾患患者は年々増加しており、精神医学の社会的重要性は高まっている。しかし、精神医学には多様な方法論が併存しており、身体医学と比較して、その理論的基礎は未確立である。本研究は、精神医学の理論的基礎には具体的にどのような問題が存在するかを明らかにしたことを通じて、精神医学の理論的基礎の確立に貢献すると考えられる。また、本研究を通じて、精神医学にはさまざまな形で価値に関する考慮やプラグマティックな考慮が重要な役割を果たしていることが明らかになったが、これは精神医学の臨床実践においても重要な知見だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：With the methodologies of analytic philosophy of mind, it was shown that there are several fundamental theoretical issues in contemporary psychiatry. First, it is not clear what is the relationship between heterogeneous approaches in contemporary psychiatry. Second, it is not clear what is the criterion of demarcation between medical problems and moral problems about human mind and behavior. Third, it is not clear how various psychiatric diseases should be categorized and what are the criteria of categorization. Further examination is necessary as to whether the pragmatic utility is the most fundamental factor in these issues.

研究分野：哲学

キーワード：精神医学の哲学 心の哲学 精神医学

## 1. 研究開始当初の背景

現在の精神医学には、多種多様な理論や実践が混在している。精神医学は、クレペリンらの生物学的なアプローチに始まり、精神分析の台頭を経て、近年では神経科学の発展を背景に生物学的なアプローチが再び隆興している。しかし、現在の精神医学には、精神療法、認知行動療法、ナラティブ・アプローチなど、多種多様な理論や実践手法が並存しており、共通のパラダイムは存在しない。したがって、精神医学の進展には、精神医学の本質はどこにあるのか、多種多様な理論や実践は本当に共存可能なのかといった理論的問題の検討が不可欠である。

これらの問題を考えるうえでは、心の哲学をはじめとする分析哲学の知見が有用である。従来、精神医学についての哲学研究は、現象学をはじめとする大陸哲学を背景とするものが中心であった。しかし、英語圏を中心とする分析哲学においては、科学の本質や特徴を論じる科学哲学に加えて、生物学の哲学や心の哲学など、個別科学に関する方法論的・理論的問題を考察する研究が活発に行われている。これらの知見は、精神医学は科学でありうるか、精神医学において生物学的な見方と心理学的な見方はどのような関係にあるのかといった問題を考えるうえで、重要な手がかりを与えてくれると考えられる。

精神医学の理論的問題にかんする分析哲学的な研究は、精神医学の哲学 (philosophy of psychiatry) として、2000 年以降活発に進められている。しかし、そこでは科学哲学や心の哲学の知見が十分に活用されているとは言い難く、科学哲学をはじめとする分析哲学と精神医学の哲学のさらに有機的な融合が求められている。

## 2. 研究の目的

以上の現状認識に基づき、本研究は、精神医学全般の理論的基礎に関する問題(精神疾患の定義、正常と異常の線引き、精神疾患の分類法など)、精神医学の代表的な理論や手法(精神療法、認知療法、ナラティブ・アプローチなど)の理論的基礎の批判的検討、個々の精神疾患に特有の理論的問題(パーソナリティ障害における社会的問題と医学的問題の線引き問題など)の検討、という3つの問題を検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究を進めるうえでは、現代の精神医学そのものについての理解を深めることと、その理論的基礎を考察するために必要な分析哲学研究についての理解を深めることがいずれも不可欠である。それゆえ、本研究においては、それぞれに関する文献調査および研究会等の開催を中心として研究を進めた。とくに研究の中核をなす活動として、東京大学駒場キャンパスおよびオンラインで、精神医学者および哲学研究者を講演者とした精神医学の哲学の研究会を継続的に開催した。

## 4. 研究成果

本研究では、主に以下の3つの問題について研究を進めた。

第一の問題は、精神医学における多様なアプローチ間の関係である。精神医学には、精神疾患の基盤となる神経細胞レベルの変化に着目する生物学的なアプローチ、認知のメカニズムの歪みなどに着目する心理学的なアプローチ、患者と社会の間の軋轢に着目する社会的なアプローチなど、多様なアプローチが存在する。それらは両立可能なものなのだろうか。そうだとすれば、それぞれのアプローチはどのような関係にあるのだろうか。また、両立不可能だとしたら、どのアプローチが適切なものなのだろうか。

この問題に関しては、本研究の結果、以下のことが明らかとなった。第一に、特定のアプローチだけですべての精神疾患を扱うことは困難であり、精神医学全体としてはすべてのアプローチが必要となると考えられる。そして、その具体的なあり方としては、すべての事例において多様なアプローチすべてが必要となるという協業的な多元主義と、事例ごとに必要となるアプローチは異なるという分業的な多元主義という2つの可能性が考えられる。

第二に、心と脳の関係や、自動車やコンピュータといった人工物の働きを理解する際にも、異なる記述のレベル間の関係が問題となる。しかし、精神医学は、特権的な記述のレベルを指定することが難しいという点や、正常なシステムの働きではなく機能不全が生じたシステムの働きが問題となるという点でこれらの事例とは異なる。このことが、精神医学におけるレベル間の関係を理解することを困難にしている一因である。

これらの研究成果の一部は、編著『心の臨床を哲学する』収録の「精神医学の多元性と科学性」として公表されている。

本研究において取り組んだ第二の問題は、精神医学の特殊性である。精神医学は、身体医学や

自然科学とは本質的に異なる学問としての性格をもつとしばしば考えられる。では、この違いは具体的にどのような点にあるのだろうか。そして、精神医学と身体医学や自然科学の違いを強調するこのような見方は、適切なものなのだろうか。

この問題に関しては、本研究の結果、以下のことが明らかとなった。精神医学の特殊性に関する1つの理解は、理解の様式にもとづくものである。人間の現象理解には、2つの異なる理解の様式が存在するとしばしば論じられる。第一の様式は、ある現象を自然法則や因果性の観点から理解するものであり、説明と呼ばれる。第二の様式は、ある現象を合理性の観点から理解するものであり、了解と呼ばれる。しかし、精神医学を了解という方法によって特徴付けることはできないように思われる。一方で、精神医学の対象ではない健康な人々の正常な行動も了解の対象となり、他方で、内因性のうつ病や統合失調症など、その症状が了解の対象となり得ない精神疾患も多くあるからである。

精神医学の特殊性を説明するためのもう1つの可能性は、自然科学と精神医学の対比を、法則定立的な学問と個性記述的な学問の対比として理解することである。自然科学が自然現象を支配する一般法則を発見する営みであるのに対して、精神医学は特定の事例の個別性を捉えることを目的とした営みだというのである。しかし、このような対比によっても、精神医学の特殊性を適切に捉えることはできないように思われる。精神医学も一般概念や一般法則をさまざまな形で利用しており、また、何をすればある事例の個別性を捉えることができるかは明らかでないからである。

以上の検討から明らかとなるのは、精神医学は身体医学や自然科学と重要な点で異なるという直観は広く共有されているが、この違いの内実を明らかにするのは容易ではないということと、両者の違いを否定し、精神医学の自然科学化を進めることも有望な選択肢だということである。

これらの研究成果の一部は、2019年度病跡学会シンポジウムにおける提題「病跡学の3つの可能性」として発表されたほか、2023年度日本精神神経学会シンポジウムにおいても発表が予定されている。

本研究で取り組んだ第三の問題は、精神医学における線引き問題である。精神医学においては、健康と病気の線引き、身体的な病気と精神的な病気の線引き、医学的な問題と道徳的な問題の線引きなど、さまざまな場面で線引きが問題となる。本研究では、そのなかでとくに医学的な問題と道徳的な問題の線引きについて検討した。

この問題に関しては、本研究の結果、以下のことが明らかとなった。精神医学において医学的な問題と道徳的な問題の線引きがとくに問題となるのは、パーソナリティ障害においてである。ある種のパーソナリティ障害に関しては、それを精神疾患とすることは道徳的な問題の医療化であるという批判がなされることがある。このような批判への応答として、何らかの客観的な基準によって医学的な問題の領域を特定しようという試みが繰り返されてきたが、いずれも成功を収めていない。そこからわかるのは、ある問題が医学的な問題であるという判断には、何らかの規範や価値が不可欠だということである。他方、ある問題が医学的な問題であるか道徳的な問題であるかは、われわれが恣意的に決定できることではないように思われる。依存症や発達障害などを見れば明らかのように、歴史的には、かつて道徳的な問題であったものが医学的問題に変化することが繰り返し生じてきた。このような現象は医療化と呼ばれるが、医療化には適切な医療化と不適切な医療化が存在するように思われるのである。

医学的な問題も道徳的な問題も、何らかの価値観の下で望ましくないものであり、その基盤には生物学的なメカニズムがある。これらの共通点をふまえた上で両者の線引きがどのようになされるべきであるのかは、今後さらなる考察が必要な問題である。

これらの研究成果の一部は、2019年度、2021年度、2022年度の日本精神神経学会シンポジウムにおける提題として発表された。

これら3つの問題の検討を通じて明らかとなったのは、精神医学におけるプラグマティックな考慮の重要性である。精神医学において多様なアプローチのいずれを重視するかということや、ある問題を医学的問題とみなすか道徳的問題とみなすかということは、どのような選択が臨床実践としてもっとも効果的かということを経験的な判断基準としているように思われる。そうだとすれば、精神医学の外延や方法論はプラグマティックな考慮によって決定されるのかも知れない。このような仮説の妥当性を検討することは、今後の重要な課題となる。

また、本研究を通じて、精神医学における新しいアプローチの重要性も明らかになった。その代表的なものは、近年の人工知能研究で用いられている道具立てを精神医学に用いる計算論的精神医学である。このようなアプローチは、従来の人間による仮説主導型の研究では扱うことが難しかった複雑なモデルを精神医学に導入することを可能にする。このようなアプローチの可能性についても、今後具体的に検討を進めたい。

なお、研究初年度の2019年度後半から新型コロナウイルス感染症が拡大したことによって、研究期間の延長にも関わらず、本研究で予定していた研究内容の一部、精神医学の主要な手法の理論的基礎に関する検討については十分な研究を実施することができなかった。また、研究成果の論文化も研究期間には十分に進めることができなかった。さらに、当初は Association for the Advancement of Philosophy and Psychiatry をはじめとする国際学会への参加や海外研究者との研究交流も予定していたが、これらも実現することができなかった。これらについては今後本研究の後継プロジェクトを実施する際の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takayuki Suzuki	4. 巻 31
2. 論文標題 The Evolutionary Origins of Consciousness: A Key to the Solution of the Hard Problem of Consciousness?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Annals of the Japan Association for Philosophy of Science	6. 最初と最後の頁 55-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4288/jafpos.31.0_55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 精神医学における医学的問題と社会的問題の線引き
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 パーソナリティ障害における線引き問題
3. 学会等名 第118回日本精神神経学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 精神医学における道徳の問題の医療化
3. 学会等名 第117回日本精神神経学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 病跡学の3つの可能性
3. 学会等名 第66回日本病跡学会総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川合伸幸、楊嘉楽、山口真美、林隆介、平井真洋、入來篤史、山崎由美子、土屋尚嗣、鈴木貴之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 238
3. 書名 認知科学講座2 心と脳	

1. 著者名 榊原英輔・田所重紀・東畑開人・鈴木貴之（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 288
3. 書名 心の臨床を哲学する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	榊原 英輔  (Sakakibara Eisuke)	東京大学・医学部	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田所 重紀  (Tadokoro Shigenori)	札幌医科大学・医学部	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関